

〈研究ノート〉

## 中等国語教育における 古典作品の取り扱い方について (1)

田中 幹子・及川 貴大

### はじめに

大学生が基本的古典作品をほとんど知らない。そこで、彼らが中学、高校でどのような古典作品にふれ、どう教育されてきたかを調査することとした。その端緒として、中学教科書の古典素材を調査し、学習指導書によってどう指導されたかを考察した。なお、今回、一緒に調査した本学二年の及川貴大君のレポートを抜粋引用したので、共同執筆者とした。

以下、及川貴大君のレポートを抜粋引用する。

中学校国語科の教科書は、現行の平成18年度版の教育出版、光村図書、学校図書、三省堂、東京書籍（教出・光村・学図・三省・東書）の5社である。それらに使われている古典教材を別表とした。（古典作品の見出し名は小学館の新古典文学全集による。）

### 古文

	教育出版
万葉集	春過ぎて 夏来たるらし 白たへの 衣干したり 天の香具山 持統天皇 君待つと 吾が恋ひをれば 我やどの すだれ動かし 秋の風吹く 額田王 近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古思ほゆ 柿本人麻呂 うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひとりし思へば 大伴家持 多摩川に さらす手作り さらさらに なにそこの児の こだかなしき 東歌 防人に 行くはたが背と 問ふ人を 見るがともしさ 物思もせず 防人の歌 瓜食めば～安眠しなさぬ 銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも 山上憶良
古今和歌集	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香にほひける 紀貫之 秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる 藤原敏行 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを 小野小町

新古今和歌集	道の辺に 清水流るる 柳陰 しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師 見わたせば 花も紅葉も なかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮れ 藤原定家 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶことの 弱りもぞする 式子内親王
沙石集	ある山寺の坊主、～無下にはあらじかし。(児の飴食ひたる事)
竹取物語	今は昔、～いとつくしうてあたり。 かかる程に、～あひ戦はむ心もなかれけり。
平家物語	祇園精舎の鐘の声、～ひとへに風の前の塵に同じ。(祇園精舎) 与一、目をふさいで、～どよめきけり。(扇の的) 汀にうちあがらんとするところに、～泣く泣く首をぞかいてんげる。(敦盛の最期)
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。(春はあけぼの) 月のいと明きに、～をかしけれ。(月のいと明きに)
徒然草	公世の二位のせうとに、～とぞ言ひける。(公世の二位のせうとに) 仁和寺にある法師、～先達はあらまほしきことなり。(五十二段 仁和寺にある法師)
奥の細道	五月雨をあつめて早し最上川 荒波や佐渡によこたふ天の河 あかあかと日はつれなくも秋の風 行く春や鳥啼き魚の目は泪 田一枚植えて立ち去る柳かな あらたふと青葉若葉の日の光 蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ 月日は百代の過客にして、～面八句を庵の柱にかけおく。(旅立ち) 三代の栄耀一睡のうちにして、～夏草や兵どもが夢の跡(平泉) 山形領に立石寺といふ山寺あり。～閑かさや岩にしみ入る蝉の声(立石寺)
	光村図書
万葉集	春過ぎて 夏来たるらし 白袴の 衣乾したり 天の香具山 持統天皇 東の 野に炎の 立つみえて かへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂 天地の～不尽の高嶺は 田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪 は降りける 山部赤人 憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ そを負ふ母も 吾を待つらむそ 山上憶良 君待つと 吾が恋ひをれば 我やどの すだれ動かし 秋の風吹く 額田王 多摩川に さらす手作り さらさらに 何そこの児の こだ愛しき 東歌 父母が 頭かき撫で 幸くあれて いひし言葉ぜ 忘れかねつる 防人の歌 新しき 年の始めの 初春の 今日降る雪の いや重け吉事 大伴家持
古今和歌集	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香ににほひける 紀貫之 しら露の 色はひとつを いかにして 秋の木の葉を ちぢにそむらむ 藤原敏行 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば さめざらましを 小野小町 飛鳥川 淵は瀬になる 世なりとも 思ひそめてむ 人は忘れじ よみ人しらず
新古今和歌集	花さそふ 比良の山風 吹きにけり こぎ行く舟の 跡みゆるまで 宮内卿 道の辺に 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師 見わたせば 花ももみじも なかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮れ 藤原定家 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶことの よわりもぞする 式子内親王
古今集仮名序	やまとうたは、～慰むるは歌なり。

中等国語教育における古典作品の取り扱い方について（1）

竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてあたり。 天人のよそほひしたる女、～うれしきことかぎりなし。 その山、～この花を折りてもうできたるなり。 御文、～言ひ伝へる。
平家物語	祇園精舎の鐘の声、～ひとへに風の前の塵に同じ。（祇園精舎） ころは二月十八日の～と言ふ者もあり。（扇の的）
いろは歌	いろはにほへと～あひもせず
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。（春はあけぼの）
徒然草	つれづれなるままに、～ものぐるほしけれ。 仁和寺にある法師、～先達はあらまほしきことなり。（五十二段 仁和寺にある法師）
奥の細道	月日は百代の過客にして、～表八句を庵の柱に懸け置く。 三代の栄耀一睡のうちにして、～五月雨の降りのこしてや光堂

学校図書	
万葉集	春過ぎて 夏來たるらし 白妙の 衣ほしたり 天の香具山 持統天皇 磐代の 浜松が枝を 引き結び 真幸くあらば また還り見む 有間皇子 東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂 天地の～不尽の高嶺は 田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪 は降りける 山部赤人 防人に 行くはたが背と 問ふ人を 見るがともしさ 物思もせず 防人の妻 春の野に 霞たなびき うら悲し この夕かげに 鶯鳴くも 大伴家持
古今和歌集	ひさかたの ひかりのどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ 紀友則 秋來ぬと めにはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる 藤原敏行 むすぶ手の しづくににごる 山の井の あかでも人に 別れぬるかな 紀貫之 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを 小野小町
新古今和歌集	山深み 春とも知らぬ 松の戸に たえだえかかる 雪の玉水 式子内親王 昔思ふ 草の庵の 夜の雨に 涙な添へそ 山ほととぎす 藤原敏行 心なき 身にもあはれは 知られけり 鴨立つ沢の 秋の夕暮れ 西行法師 駒とめて 袖打ち払ふ 陰もなし 佐野のわたりの 雪の夕暮れ 藤原定家
古今集仮名序	力をも入れずして、～慰むるは歌なり。
竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてあたり。 宵うち過ぎて、～羅蓋さしたり。 翁・姫、血の涙を流して惑へど、～御遊びなどもなかりけり。
平家物語	祇園精舎の鐘の声、～ひとへに風の前の塵に同じ。（祇園精舎） 戦敗れにければ、～熊谷が発心の思ひは進みけれ。（巻九より）
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。（第1段 春はあけぼの） うつくしきもの。～いとうつくし。（第151段 うつくしきもの） 雪のいと高う降りたるを、～さべきなめり。」と言ふ。（第299段 香炉峰の雪）
徒然草	独りともし火のもとに文を広げて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むるわざなる。 つれづれなるままに、～あやしうこそものぐるほしけれ。（序段） 高名の木登りと言ひしをのこ、～とはべるやらん。（第109段 高名の木登り） 「奥山に、～飛びつきたりけるとぞ。」（第89段 猫また）

宇治拾遺物語	「このほどいみじく尊きことあり。～今宵とどまりて拝みたまへ。」 九月二十日のことなれば夜も長し。～待る坊の前に立ちたまへり。 「いかに。主殿は拝みたてまつるや。」 「聖は年ごろ経をもたもち、～見えたまへるは心得られぬことなり。」 「このこと、試みてむ。～死にて伏せりけり。」 聖なれど無知なれば～その化けを現しけるなり。
奥の細道	月日は百代の過客にして、～表八句を庵の柱にかけおく。 三代の栄耀一睡のうちにして、～五月雨の降りのこしてや光堂 行く春や鳥啼き魚の目は泪 閑かさや岩にしみ入る蟬の声 五月雨をあつめて早し最上川 荒波や佐渡によこたふ天の河
百人一首	逢ひ見ての 後の心に くらぶれば 昔はものを 思はざりけり 藤原敦忠
	三省堂
万葉集	春過ぎて 夏来たるらし 白妙の 衣ほしたり 天の香具山 持統天皇 東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂 銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも 山上憶良 我が屋戸の 大伴家持 天地の～不尽の高嶺は 田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪 は降りける 山部赤人 あしひきの 山の雫に 妹待つと われ立ち濡れぬ 山の雫に 大津皇子 我を待つと 石川郎女 多摩川に さらす手作り さらさらに 何そこの児の ここだ愛しき 東歌
古今和歌集	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香ににほひける 紀貫之 花の色は 小野小町 秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる 藤原敏行
新古今和歌集	道の辺に 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師 駒とめて 袖打ち払ふ 陰もなし 佐野のわたりの 雪の夕暮れ 藤原定家 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする 式内親王
竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてあたり。 天人の中に、～文書く。 中将取りつれば、～かひなし。
平家物語	祇園精舎の鐘の声、～ひとへに風の前の塵に同じ。(祇園精舎) 熊谷、～泣きあたる。(敦盛の最期)
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。 うつくしきもの～うつくし。
徒然草	つれづれなるままに、～あやしうこそものぐるほしけれ。 仁和寺にある法師、～先達はあらまほしきことなり。
奥の細道	月日は百代の過客にして、～面八句を庵の柱に懸け置く。 三代の栄耀一睡のうちにして、～五月雨の降り残してや光堂 さみだれをあつめて早し最上川 閑かさや岩にしみ入る蟬の声 行く春や鳥啼き魚の目は泪 蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

中等国語教育における古典作品の取り扱い方について（1）

東京書籍	
万葉集	東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂 瓜食めば～安眠しなさぬ 銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも 山上憶良 若の浦に 潮満ち来れば 渴をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る 山部赤人 うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひとりし思へば 大伴家持 信濃道は 今の壘り道 刈りばねに 足踏ましなむ 杵はけ我が背 東歌 韓衣 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬや 母なしにして 防人歌
古今和歌集	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香ににほひける 紀貫之 秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる 藤原敏行 うたたねに 恋しき人を 見てしより 夢てふ物は 頼みそめてき 小野小町
新古今和歌集	山ふかみ 春とも知らぬ 松の戸に たえだえかかる 雪の玉水 式子内親王 道のべに 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師 駒とめて 袖打ち払ふ 陰もなし 佐野のわたりの 雪の夕暮れ 藤原定家
竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてあたり。 かぐや姫、泣く泣く言ふ、～いみじく泣く。
平家物語	ころは二月十八日の～どよめきけり。(扇的) あまりのおもしろさに、～と言ふものもあり。 祇園精舎の鐘の声、～心も詞も及ばれぬ。
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。(春はあけぼの)
徒然草	ある人、～万事にわたるべし。(ある人、弓射ることを習ふに) 雪のおもしろう降りたりし朝、～かばかりのことも忘れがたし。(雪のおもしろう降り たりし朝)
宇治拾遺物語	今は昔、木こりの、～よきを取られて我いかにせん。(第40話)
奥の細道	あらたふと青葉若葉の日の光 田一枚植ゑて立ち去る柳かな 閑かさや岩にしみいる蟬の声 五月雨をあつめて早し最上川 荒波や佐渡によこたふ天の河 石山の石より白し秋の風 月日は百代の過客にして、～五月雨の降りのこしてや光堂
伊勢物語	昔、男ありけり。～惑ひにけり。(第9段)
源氏物語	いづれの御時にか、～すぐれてときめきたまふありけり。(「桐壺」)
土佐日記	男もすなる日記といふものを、～いささかにものに書きつく。(冒頭)
梁塵秘抄	舞へ舞へ蝸牛、～花の園まで遊ばせむ(子どもの遊び歌)
方丈記	行く河の流れは絶えずして、～またかくのごとし。(冒頭)
謡曲	高砂や、～着きにけり。(「高砂」)
お伽草紙	昔、丹後国に、～釣りをせんとして出でにけり。(「浦島太郎」)

古文学年別

1年

教育出版	
沙石集	ある山寺の坊主、～無下にはあらじかし。(児の飴食ひたる事)

竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてあたり。 かかる程に、～あひ戦はむ心もなけれり。
------	--

2年

教育出版	
平家物語	祇園精舎の鐘の声、～ひとへに風の前の塵に同じ。(祇園精舎) 与一、目をふさいで、～どよめきけり。(扇の的) 汀にうちあがらんとするところに、～泣く泣く首をぞかいてんげる。(敦盛の最期)
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。(春はあけぼの) 月のいと明きに、～をかしけれ。(月のいと明きに)
徒然草	公世の二位のせうとに、～とぞ言ひける。(公世の二位のせうとに) 仁和寺にある法師、～先達はあらまほしきことなり。(五十二段 仁和寺にある法師)

3年

教育出版	
万葉集	春過ぎて 夏来たるらし 白たへの 衣干したり 天の香具山 持統天皇 君待つと 吾が恋ひをれば 我やどの すだれ動かし 秋の風吹く 額田王 近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古思ほゆ 柿本人麻呂 うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひとりし思へば 大伴家持 多摩川に さらす手作り さらさらに なにそこの児の ここだかなしき 東歌 防人に 行くはたが背と 問ふ人を 見るがもしさ 物思もせず 防人の歌 瓜食めば～安眠しなさぬ 銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも 山上憶良
古今和歌集	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香にほひける 紀貫之 秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる 藤原敏行 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを 小野小町
新古今和歌集	道の辺に 清水流るる 柳陰 しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師 見わたせば 花も紅葉も なかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮れ 藤原定家 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶことの 弱りもぞする 式子内親王
奥の細道	五月雨をあつめて早し最上川 荒波や佐渡によこたふ天の河 あかあかと日はつれなくも秋の風 行く春や鳥啼き魚の目は泪 田一枚植ゑて立ち去る柳かな あらたふと青葉若葉の日の光 蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ 月日は百代の過客にして、～面八句を庵の柱にかけおく。(旅立ち) 三代の栄耀一睡のうちにして、～夏草や兵どもが夢の跡(平泉) 山形領に立石寺といふ山寺あり。(立石寺)

1年

光村図書	
竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてあたり。 天人のよそほひしたる女、～うれしきことかぎりなし。 その山、～この花を折りてもうできたるなり。 御文、～言ひ伝へる。

中等国語教育における古典作品の取り扱い方について（1）

2年

	光村図書
平家物語	祇園精舎の鐘の声、～ひとへに風の前の塵に同じ。（祇園精舎） ころは二月十八日の～と言ふ者もあり。（扇の的）
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。
徒然草	つれづれなるままに、～ものぐるほしけれ。 仁和寺にある法師、～先達はあらまほしきことなり。（五十二段 仁和寺にある法師）

3年

	光村図書
万葉集	春過ぎて 夏来たるらし 白袴の 衣乾したり 天の香具山 持統天皇 東の 野に炎の 立つみえて かへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂 天地の～不尽の高嶺は 田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪 は降りける 山部赤人 憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ そを負ふ母も 吾を待つらむそ 山上憶良 君待つと 吾が恋ひをれば 我やどの すだれ動かし 秋の風吹く 額田王 多摩川に さらす手作り さらさらに 何そこの児の ここだ愛しき 東歌 父母が 頭かき撫で 幸くあれて いひし言葉ぜ 忘れかねつる 防人の歌 新しき 年の始めの 初春の 今日降る雪の いや重け吉事 大伴家持
古今和歌集	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香にほひける 紀貫之 しら露の 色はひとつを いかにして 秋の木の葉を ちぢにそむらむ 藤原敏行 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば さめざらましを 小野小町 飛鳥川 淵は瀬になる 世なりとも 思ひそめてむ 人は忘れじ よみ人しらず
新古今和歌集	花さそふ 比良の山風 吹きにけり こぎ行く舟の 跡みゆるまで 宮内卿 道の辺に 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師 見わたせば 花ももみじも なかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮 藤原定家 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの よわりもぞする 式子内親 王
古今集仮名序	やまとうたは、～慰むるは歌なり。
いろは歌	いろはにほへと～あひもせず
奥の細道	月日は百代の過客にして、～表八句を庵の柱に懸け置く。 三代の栄耀一睡のうちにして、～五月雨の降りのこしてや光堂

1年

	学校図書
竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてゐたり。 宵うち過ぎて、～羅蓋さしたり。 翁・姫、血の涙を流して惑へど、～御遊びなどもなかりけり。
徒然草	独りとしし火のもとに文を広げて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むるわざなる。
宇治拾遺物語	「このほどもいじく尊きことあり。～今宵とどまりて拝みたまへ。」 九月二十日のことなれば夜も長し。～侍る坊の前に立ちたまへり。 「いかに。主殿は拝みたまつるや。」 「聖は年ごろ経をもたもち、～見えたまへるは心得られぬことなり。」 「このこと、試みてむ。～死にて伏せりけり。」 聖なれど無知なれば～その化けを現しけるなり。

2年

	学校図書
古今集仮名序	力をも入れずして、～慰むるは歌なり。
平家物語	祇園精舎の鐘の声、～ひとへに風の前の塵に同じ。(祇園精舎) 戦敗れにければ、～熊谷が発心の思ひは進みけれ。(巻九より)
徒然草	つれづれなるままに、～あやしくこそものぐるほしけれ。(序段) 高名の木登りと言ひしをのこ、～とはべるやらん。(第109段 高名の木登り) 「奥山に、～飛びつきたりけるとぞ。」(第89段 猫また)
宇治拾遺物語	「このほどいみじく尊きことあり。～今宵とどまりて拝みたまへ。」

3年

	学校図書
万葉集	春過ぎて 夏来たるらし 白妙の 衣ほしたり 天の香具山 持統天皇 磐代の 浜松が枝を 引き結び 真幸くあらば また還り見む 有間皇子 東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂 天地の～不尽の高嶺は 田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪 は降りける 山部赤人 防人に 行くはたが背と 問ふ人を 見るがともしさ 物思もせず 防人の妻 春の野に 霞たなびき うら悲し この夕かげに 鶯鳴くも 大伴家持
古今和歌集	ひさかたの ひかりのどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ 紀友則 秋来ぬと めにはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる 藤原敏行 むすぶ手の しずくににごる 山の井の あかでも人に 別れぬるかな 紀貫之 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを 小野小町
新古今和歌集	山深み 春とも知らぬ 松の戸に たえだえかかる 雪の玉水 式子内親王 昔思ふ 草の庵の 夜の雨に 涙な添へそ 山ほととぎす 藤原敏行 心なき 身にもあはれは 知られけり 鴨立つ沢の 秋の夕暮れ 西行法師 駒とめて 袖打ち払ふ 陰もなし 佐野のわたりの 雪の夕暮れ 藤原定家
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。(第1段 春はあけぼの) うつくしきもの。～いとうつくし。(第151段 うつくしきもの) 雪のいと高う降りたるを、～さべきなめり。」と言ふ。(第299段 香炉峰の雪)
奥の細道	月日は百代の過客にして、～表八句を庵の柱にかけおく。 三代の栄耀一睡のうちにして、～五月雨の降りのこしてや光堂 行く春や鳥啼き魚の目は泪 閑かさや岩にしみ入る蟬の声 五月雨をあつめて早し最上川 荒波や佐渡によこたふ天の河
百人一首	逢ひ見ての 後の心に くらぶれば 昔はものを 思はざりけり 藤原敦忠

1年

	三省堂
竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてあたり。 天人の中に、～文書く。 中将取りつれば、～かひなし。



中等国語教育における古典作品の取り扱い方について（1）

2年

三省堂	
平家物語	祇園精舎の鐘の聲、～ひとへに風の前の塵に同じ。(祇園精舎) 熊谷、～泣きわたる。(敦盛の最期)
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。 うつくしきもの～うつくし。
徒然草	つれづれなるままに、～あやしうこそものぐるほしけれ。 仁和寺にある法師、～先達はあらまほしきことなり。

3年

三省堂	
万葉集	春過ぎて 夏来たるらし 白妙の 衣ほしたり 天の香具山 持統天皇 東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂 銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも 山上憶良 我が屋戸の 大伴家持 天地の～不尽の高嶺は 田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪 は降りける 山部赤人 あしひきの 山の雫に 妹待つと われ立ち濡れぬ 山の雫に 大津皇子 我を待つと 石川郎女 多摩川に さらす手作り さらさらに 何そこの児の ここだ愛しき 東歌
古今和歌集	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香にほひける 紀貫之 花の色は うつりにけりな いたづらに わが身世にふる ながめせしまに 小野小町 秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる 藤原敏行
新古今和歌集	道の辺に 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師 駒とめて 袖打ち払ふ 陰もなし 佐野のわたりの 雪の夕暮れ 藤原定家 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶことの 弱りもぞする 式子内親王
奥の細道	月日は百代の過客にして、～面八句を庵の柱に懸け置く。 三代の栄耀一睡のうちにして、～五月雨の降り残してや光堂 さみだれをあつめて早し最上川 閑かさや岩にしみ入る蟬の聲 行く春や鳥啼き魚の目は泪 蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

1年

東京書籍	
竹取物語	今は昔、～いとうつくしうてゐたり。 かぐや姫、泣く泣く言ふ、～いみじく泣く。
枕草子	春はあけぼの。～灰がちになりてわろし。
伊勢物語	昔、男ありけり。～惑ひにけり。(第9段)
源氏物語	いづれの御時にか、～すぐれてときめきたまふありけり。〔桐壺〕
土佐日記	男もすなる日記といふものを、～いささかにものに書きつく。(冒頭)
梁塵秘抄	舞へ舞へ蝸牛、～花の園まで遊ばせむ(子どもの遊び歌)

2年

	東京書籍
平家物語	ころは二月十八日の〜どよめきけり。(扇の的) あまりのおもしろさに、〜と言ふものもあり。 祇園精舎の鐘の声、〜心も詞も及ばれぬ。
徒然草	ある人、〜万事にわたるべし。(ある人、弓射ることを習ふに) 雪のおもしろう降りたりし朝、〜かばかりのことも忘れがたし。(雪のおもしろう降りたりし朝)
方丈記	行く河の流れは絶えずして、〜またかくのごとし。(冒頭)
宇治拾遺物語	今は昔、木こりの、〜よきを取られて我いかにせん。(第40話)
謡曲	高砂や、〜着きにけり。(「高砂」)
お伽草紙	昔、丹後国に、〜釣りをせんとて出でにけり。(「浦島太郎」)

3年

	東京書籍
万葉集	東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂 瓜食めば〜安眠しなさぬ 銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも 山上憶良 若の浦に 潮満ち来れば 渦をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る 山部赤人 うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひとりし思へば 大伴家持 信濃道は 今の壑り道 刈りばねに 足踏ましなむ 沓はけ我が背 東歌 韓衣 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬや 母なしにして 防人歌
古今和歌集	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香にはほひける 紀貫之 秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる 藤原敏行 うたたねに 恋しき人を見 してしより 夢てふ物は 頼みそめてき 小野小町
新古今和歌集	山ふかみ 春とも知らぬ 松の戸に たえだえかかる 雪の玉水 式子内親王 道のべに 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師 駒とめて 袖打ち払ふ 陰もなし 佐野のわたりの 雪の夕暮れ 藤原定家
奥の細道	田一枚植えて立ち去る柳かな 閑かさや岩にしみいる蟬の声 五月雨をあつめて早し最上川 荒波や佐渡によこたふ天の河 石山の石より白し秋の風 月日は百代の過客にして、〜五月雨の降りのこしてや光堂

古文割合

	教育出版	光村図書	学校図書	三省堂	東京書籍
1年	16 (296) 5.4%	21 (269) 7.8%	27 (347) 7.7%	11 (236) 4.6%	20 (260) 7.6%
2年	20 (296) 6.7%	21 (267) 7.8%	26 (333) 7.8%	21 (232) 9.0%	20 (264) 7.5%
3年	24 (296) 8.1%	23 (269) 8.5%	25 (347) 7.2%	14 (236) 5.9%	16 (268) 5.9%

すべての教科書に1年で『竹取物語』、2年で『平家物語』『徒然草』、3年で三大集と『奥の細道』が採用されている。それぞれの学年でなぜこれらが選ばれたかを考察した。

## 1 「竹取物語」

『竹取物語』は、延べで10場面。冒頭部分「今は昔、～いとうつくしうてあたり。」はすべてに掲載。ここで物語の枠組を理解する。指導書に「鑑賞」を主体にした扱いとあるように、『竹取物語』は、読解を目的とする教材である。

学習目標は3つ。

1 「現代と異なる意味を持つ言葉に注意し、文の意味のおおよそを読み取る。」

「竹の中からかぐや姫が誕生した。」の程度の知識は、ほとんどの人が持っている。断片的にでもなじみがあるからこそ、言葉の意味が頭の中に入っていくやすく、意味の推測もすることが可能ではないであろうか。

2 「古典の仮名遣いに慣れる。」

「古典の入門期にあたるこの時期に、現代とは異なる仮名遣いやその響きに慣れることで、今後の古典学習への意欲をもつことにつながる」とされ、手段として、「冒頭部の暗唱」、「古典箇所音読、朗読」が用いられる。『竹取物語』は、『源氏物語』に比べ、漢語が適宜に混じる和漢混濁文であり、区切りがはっきりし、平易な文章で読み取りやすい。その意味で「音読」しやすい教材といえる。

3 「古典のおもしろさに目を向ける。」

冒頭以外の場面は、各社によって違いが見られる。しかし、どの場面も常識を超える場面である。ストーリーが明快で、奇抜である。「古典のおもしろさ」を気づかせるには最適な教材であろう。さらに、「物語のいでき始めの祖」（『源氏物語』『絵合]）という意義もある。

これをどのように学ぶのであろうか。指導書に授業展開例が「鑑賞」系統、「音読・朗読」系統の2種が記されている。ともに5時間かけるが、3時間目の取り扱いが大きく違う。「鑑賞」系統の場合は1時間かけて内容を読み取るが、「音読・朗読」系統の場合は様々な方法で音読することに1時間使っている。しかし、両者ともに音読を通して、内容の理解を行っているので、音読が重要視されていることが窺える。

なお、『竹取物語』に関しては、中島和歌子氏「中学校国語教科書『竹取物語』の挿絵をめぐる問題点と可能性—『竹取物語絵巻』昇天図の解釈と分類—」（平成19年8月・札幌国語研究12巻）が挿絵を通して詳しく中学古典教材としての『竹取物語』研究をまとめておられる。

## 2 「平家物語」

『平家物語』は、すべての2年の教科書に掲載。延べで8場面掲載。冒頭部「祇園精舎の鐘の声。」はすべての教科書に掲載。「扇の的」は（教出・光村・東書）に掲載。「敦盛の最期」は（教出・三省）に掲載。指導書にも「音読や朗読することを通して、古文や漢文の口調に慣れ、言葉の響きに興味をもつことをねらいとしている。」とされている。

琵琶法師によって「平曲」として語られた『平家物語』は、読む文学ではなく、聞く文学である。よって、難解な語彙がすくなく、調子も七五調でもあり、音読に適した教材といえる。冒頭部は、暗唱教材としても適している。

学習目標は指導書の中で3つ。

「古文と漢文の共通点や相違点に気づく。」「古文や漢文の口調に慣れる。」

『平家物語』は、和漢混清文である。和文と漢文訓読調が混ざっているので、音読しながら、自然に古文と漢文の共通点と相違点に気づくような教材である。「歴史的仮名遣いを正しく現代仮名遣いに直して音読」を目標として「独特のリズムや響きに興味をもち、実際に声に出して読ませることに特に重点をおいた指導を展開したい。」とされている。

「当時の人々の考え方を知る。」

貴族の世から武士の世に移り変わる変革期の中で生きた人々の気持ちを想像するためには、源平の争乱などある程度歴史的知識が必要だが、指導書には「細かな語釈や文法上の知識の学習を最低限におさえ、現代にも通じる古人の心に触れながら読むことが大切となるであろう。」とされている。一話完結型であり、登場人物の年齢も若いので、感情移入しやすい教材である。

授業展開例は、「音読・朗読」系列、「鑑賞」系列の2種、ともに4時間である。

「音読」系の場合、リズムを獲得するためのCD利用を行い、最後に台本を作り発表させるなどさまざまな形で音読をさせようとしているのが窺える。「鑑賞」系の場合も音読する中で内容をとらえようとしている。4時間目では、『論語』の訓読文との比較である。ここでも音読教材としての扱い方である。

1年の古典導入としての『竹取』に比べ、学習目標に歴史的知識を持ちながら、当時の人の感情を探ろうという姿勢は見られるが、指導方法を見ると、手段は、専ら「音読」であることがわかる。

## 3 「徒然草」

『徒然草』は、2年のすべての教科書で掲載（「独りともし火のもとに文を広げて、見ぬ

世の人を友とするぞ、こよなう慰むるわざなる。」のみ学図の1年生用掲載)。延べで8場面。冒頭部「つれづれなるままに、～ものぐるほしけれ。」が光村、学図、三省に掲載。著名な冒頭ではあるが、教出・東図には採られていない。冒頭の扱いも紹介程度で、音読教材という意識は感じられない。指導書に「日本人の心の中に息づいてきた伝統的な人生観や自然観、そして価値観の一端に触れることが期待できる。」とされ、鑑賞に重点が置かれている。簡潔な文章で、内容把握が容易であるためであろう。

「仁和寺にある法師、～先達はあらまほしきことなり。」(教出・光村・三省)や「公世の二位のせうとに、～とぞ言ひける。」(教出)、「高名の木登りと言ひしをのこ、～とはべるやらん。」、「奥山に、～飛びつきたりけるとぞ。」(学図)、「ある人、～万事にわたるべし。」、「雪のおもしろう降りたりし朝、～かばかりのことも忘れがたし。」(東書)、等、適度なおかしみを含む教訓的な内容で中学生の教材としてふさわしい。

学習目標は3つ。

「言葉の意味を正確にとらえながら読む。」

言葉の意味を正確に捉えるということは、『徒然草』を読解しようとしていることがわかる。簡潔な文章の『徒然草』は適した教材であろう。

「係り結びについて知り、その効果を考える。」

文法に関しては「深入りすることは禁物である」とされている。文法アレルギーで読解意欲を失わせていけないという配慮か。

「筆者たちの自然や人間に対する視点について考える。」

「現代のわたしたちとどう異なるのか。また、共通点はないのか。」とあるのは、時代を超える価値観があるかという観点であろう。共通するものがあれば、古典を身近に感じさせられる。その意味で作者の価値観が明確にでる随筆は適した教材であろう。指導書に「大きく筆者のものの見方や考え方をとらえることに重点をおくとよい。」とある。内容把握を第一優先していることがわかる。

その手段としては、まずは、音読である。音読を繰り返し、内容の概略を理解するようにさせるというものである。授業の展開例は「鑑賞」系統、「音読・朗読」系統と4時間で2種類あげられている。「鑑賞」系では4時間目に、音読から内容を理解し、係り結びについても触れる。「音読」系では、4時間目に序段を暗唱させ、発表させる。今までは音読のみに重点が置かれていたのに対し、音読から内容を理解することに重点が置かれるようになり、古典学習の発展がみられる。

#### 4 この他の教材

この他、『枕草子』と『奥の細道』がすべての教科書に採用されている。『枕草子』は、単独教材としてよりは、2年の古典導入として冒頭部分が音読用に紹介されている扱いである。

『奥の細道』が、3年のすべての教科書で採用されている。5場面、10句掲載。冒頭部「月日は百代の過客にして」がすべての教科書で採用され、暗唱用教材とされる。「五月雨の降りのこしてや光堂」「夏草や兵どもが夢の跡」「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」等、著名句が複数掲載されている。指導法として、冒頭部分を暗唱させることも推奨されている。俳句を交えた独特の文体で、紀行文学の代表である。簡潔で格調高い文章が、音読に最適と判断されたのであろう。

なお、『奥の細道』の指導方法の研究に関しては中島和歌子氏が「中学校国語教科書における古典教材の選択と指導法について—『おくのほそ道』と他の詩歌の連関を中心に—」(平成19年8月・『札幌国語研究』12巻)において漢詩教材を紹介しながら『奥の細道』の指導方法の可能性について考察されている。

この他の『宇治拾遺物語』は、学図の1年生用教科書に6場面掲載されているが、扱いとしては、「広める・深める」という発展学習的扱いである。1場面採用の東書の2年生用教科書も、発展学習に鎌倉・室町の文学史資料としての掲載である。ここには、『方丈記』冒頭、『謡曲』高砂、『お伽草紙』「浦島太郎」が紹介されている。

東書は、1年の発展学習の奈良・平安の文学史資料に『伊勢物語』九段、『源氏物語』冒頭、『土佐日記』冒頭、『梁塵秘抄』「舞へ舞へ蝸牛(子どもの遊び歌)」が紹介されている。『いろは歌』も光村の3年生に資料紹介として掲載されている。『奥の細道』以外の作品は、サブ教材的扱いである。(以上、及川レポートより抜粋)

#### 5 中学国語教科書に取り上げられている和歌の扱い(田中)

音読重視にもかかわらず、和歌は、実質的には5社すべて3年まで扱わない。凝縮された表現が、難しいと判断されたのだろうか。『古今集』「仮名序」の取り上げ方も、文学論としての意義ではなく、音読してことばの響きを楽しむという姿勢である<sup>(註1)</sup>。和歌の扱いは、すべての教科書で三大集をひとくくりとして紹介している<sup>(註2)</sup>。

歌数は、『万葉集』10人20首、『古今和歌集』5人9首、『新古今和歌集』5人8首掲載されている。所収歌数の違いも加味しても、『万葉集』重視の傾向がうかがえる。内容の平易さによるか。採られているのは三大集の特徴がはっきり表れている歌である。

『万葉集』の最多重出歌は、持統天皇の「春過ぎて夏来たるらし白たへの衣ほしたり天

の香具山」（巻一・28）（教出・光村・学図・三省）と、人麻呂の「東の野に炎の立つみえてかへり見すれば月かたむきぬ」（巻一・48）（光村・学図・三省・東書）である。素朴で雄大な万葉歌である。

長歌は、すべての教科書にとりあげられている<sup>(註3)</sup>。東歌と防人歌は、それぞれ4社と3社がとりあげている。

内容は、雄大な万葉歌のほか、憶良の「憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ」（巻三・340）や防人歌の「父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる」（巻三・4370）という親子の情愛歌が選ばれている。

大伴家持については、最終歌の「新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事」（巻三・4540）（光村）や「うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば」（巻三・4316）（教出・東書）、「春の野に霞たなびきうら恋しこの夕かげに鶯鳴くも」（巻十・1906）（学図）の春憂歌が選ばれ、編集者家持への特別な配慮がうかがわれる。

額田王の「君待つと吾が恋ひをれば我やどのすだれ動かし秋の風吹く」（巻四・491／巻八・1610）が（教出・光村）に採られているが「相聞」歌はそれほど多くは掲載されていない。恋歌を避けたか。

作者別で見ると、柿本人麻呂、大伴家持、山上憶良はすべてに掲載。持統天皇、山部赤人は4社掲載。第1期歌人があまり採られておらず、国ほめ歌など、大君歌が紹介されていないのが残念である。

『古今和歌集』の最多重出歌は貫之の「人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香にほひける」（春上・42）（教出・光村・三省・東書）と、敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（秋上・169）（教出・学図・三省・東書）である。ともに漢籍の教養をもとにした「知」の歌集、『古今集』にふさわしい歌である<sup>(註4)</sup>。

小町の「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」（恋二・552）が（教出・光村・学図）に掲載されている<sup>(註5)</sup>。紀貫之と敏行と小町が5社すべてに採られている。貫之とともに『古今集』二大歌人である躬恒が採られていない。中学国語では、「心当てに折らばや折らむ初霜の置きまどわせる白菊の花」（秋下・277）に代表される“紛れ”の手法を得意とする躬恒歌はやや難解か<sup>(註6)</sup>。小町は、女流で恋歌の名手として、また六歌仙の代表として採られているように思われる。『百人一首』の「花の色は」（古今・春下・113）歌以外に夢の歌人としての代表歌「思ひつつ」歌が選ばれており、おむね妥当な撰歌である。

『新古今和歌集』の最多重出歌は、西行の「道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」（夏・262）（教出・光村・三省・東書）である。定家の「駒とめて袖打ち

払ふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮れ」(冬・671)は(学図・三省・東書)に掲載, 続いて式子内親王の「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする」(恋一・1034)(教出・光村・三省)。この他, 定家は「見わたせば花ももみじもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」(秋上・363)(教出・光村), 式子は「山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水」(春上・3)が(学図・東書)に重出。『新古今集』最多収録歌人西行と編集者定家と代表的女流歌人式子はすべての教科書に掲載。

ただ, 西行の代表歌「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ」(秋上・362)は, 学図のみ掲載で, なぜ他社で「道のべに」歌を掲載したのかが不審である<sup>(注7)</sup>。

また, 学図は, 敏行の「昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山ほととぎす」(夏・201)が選ばれているが, 『新古今集』歌の紹介であえて古今歌人を取り上げた理由が不審である。

以上, おおむね三大集の特徴を伝える歌人と採歌がなされているといえよう。

但し, 個々の歌集としての取り上げ方としては, ほぼ問題がないが, お互いの関連性, つまり文学史的視野からみでの三大集の位置づけができるような和歌が格別選ばれていない。たとえば, 『百人一首』に重なる歌も4首にすぎず, さほど重要視していないと思われる。

北海道立高等学校入試の過去問題に和歌が出題されたことがあるが, その設問が『古今集』と『新古今集』を比較して, 本歌取りを問うものであった<sup>(注8)</sup>。

試験対策ではないが, 『新古今集』に採られた『万葉集』歌から, 新古今時代の『万葉集』評価や, 『新古今集』に見られる『古今集』歌の本歌取り, 『百人一首』への採歌など, 文学史的視野からの採歌がなされれば, 各担当教員の力量によって, 現場での指導の広がりの可能性をこめた教材となるのではないだろうか。

注1 学図の2年「言葉の力」の解説の一例としての扱い, 光村の3年も「音読をたのしもう」という課題の教材である。

注2 「古典を味わおう一万葉・古今・新古今」(東書), 「和歌の世界一万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」(三省), 「古典をたのしむ」の「君待つと一万葉・古今・新古今」(光村), 「詩歌の味わい一万葉・古今・新古今」(教出), 「歌の源流へ一万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」(学図)。

注3 「天地の～不尽の高嶺は田子の浦ゆうち出でてみれば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける(山部赤人)」(万葉・巻一・320)は光村・学図・三省, 「瓜食めば～安眠しなさぬ 銀も金も玉も何せむに勝れる宝こにしかめやも(山上憶良)」(万葉・巻五・806)は教出・東書に掲載される。

注4 「香」を詠むようになるのは, 漢詩の影響。「立秋」巻頭歌は, 「礼記」の影響。

注5 三省は「花の色は」歌, 東書は「うたたねに」歌。

注6 敏行歌「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちちにそむらむ」(古今・秋下・257)も漢



詩の対句表現の影響がある。

注7 『奥の細道』の道中、「遊行柳」がある葭野の里（那須町芦野）により「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」の句が詠まれた。

注8 平成13年北海道高等学校入試問題三に敏行の「秋来ぬと」（古今・秋・169）を本歌取りした秀能の「吹く風の色こそ見えね高砂の尾上の松に秋は来にけり」（新古今・秋・290）の比較問題が出題。

## 私 見

以上、中学国語の古典教材を見てきた。教材研究とも言えない雑ばくな分析だが、気づいた点は、過剰ともいえる「音読」重視の姿勢である。古典表現、歴史的仮名遣いになじみを持たせるために、もっぱら音読・暗唱という方法をとる。従って、扱う教材も「音読」「暗唱」に適した教材が選ばれている。指導書があまりに「音読」を連呼するので、うがった見方をすれば、作品の文学性、つまり物語性よりも、まずは「音読」にふさわしいか否かで教材が選ばれているようにさえ思われる。

個別の扱いではなく、もっと文学史的視野で作品を選べないのであろうか。中学であれば、日本史の知識もある程度持っているはずである。平安期がこれほど欠落していることに愕然とした。資料編として副次的に指導するのではなく、教材選択の段階で、文学史的視野の中で作品を選ぶ工夫がされるべきであろう。

おそらく、和文の古典表現が難解という判断であろうが、古典文学の核というべき、『伊勢物語』『源氏物語』『枕草子』に代表される平安文学がほとんどふれられていないのは、問題があると思う。これらは、充分「音読」教材にも適している。

「音読」によって古典への抵抗感をなくすという手法の他に、古典の持っている物語の力で古典への興味を持たせることができるのではないか。携帯小説やRPGにはまる学生たちは物語性に飢えているように思える。文法や知識に捕らわれず、千年の時空を超えて生き残る古典の骨太で大胆な物語性を伝えることが、日本という国や民俗を考えることにも通じる教育になるのではないだろうか。